

巻頭言

人間としての…

板野中学校長 漆 原 都 夫

「人間としての生き方についての自覚を深め」という新学習集指導要領の一節を私は現在の中学校教育における最も重要なテーマの一つとして受け止めています。

これを本校では「人命・人権を大切にし、人格の向上を目指す教育」として学校における教育活動全体で取り組むだけでなく、地域・家庭の協力を得て、全人教育、生涯活動の課題として考えていこうとして研究実践を始めました。

その基本的課題を学校教育のなかで具体的に行うとすれば、道徳、特活、同和教育などの分野で行うのが最も有効だと考え、まず同和問題学習に取り組みました。そのなかで本校2年団10名の教師と、5学級184名の生徒たちが自主的に協力し合い、助け合い、議論し合って、授業実践と学年だより「ねんりん」の発行を行いました。研究のまとめとして、この冊子ができあがりました。

学校全体のまとめまでに至らず、2年団だけの取組みのまとめであり、授業者も主任以外は教職10年未満のものばかりで、研究内容もまだまだ未熟であり、授業実践も理想には程遠い面もありますが、こうした研究実践の第一歩が印されたことに大きな意義を認め、その労苦に感謝の意を表したいと思います。

なお、学年だより「ねんりん」も年間300号にも及ぶものになりましたが、そのまとめは別冊で学年末に発行される予定です。

こうした研究実践を土台に今後本校においては、道徳、同和の接点を求め、人権教育、人間教育として一段と充実した内容とするよう全教職員が力を合わせていきたいと思っております。そうすることによって、一人一人の生徒が学力を向上させ、豊かな人間性を持って、強くたくましく生きていく力をつけお互いに助け合って、幸せを求めて歩んでいくと思っています。

本冊子を御笑覧いただき、とくに学習指導案、授業記録について個別に御指導御講評を賜り、今後の実践に活かしていきたいと思っておりますので、忌憚ない御意見をお寄せくだされば幸いに存じます。

今後とも、本校の教育実践にたいし、厳しい御叱正と暖かいご協力、ご高配をお願い申し上げます。

はじめに

平成2年度の板野中学校2年生団は186名の生徒と10名の教師集団でスタートした。板野という一つの場において同じ時間を共有しつつそれぞれの思いを抱き、希望を持ち、スクラムを組み、ときには悲しく、くやしい思いをしながらも充実した1年を送ることができた。

子供たちは教師を選ぶことができず、教師も子供たちを選ぶことはできない。また、私たち教師間においても同僚を選ぶことはできない。私たちの出会いは私たちの意志とは無関係の中で繰り返される。それだからこそ互いが協力し合い、信頼し合うことの大切さを毎日毎日の生活の中から実感していくように思われる。今年の2年生にとっては「もちあがり」の担任は一人もいなかった。また、私たちもほとんどが初めての顔合わせでありそれだけ新鮮に新しい気持ちで、しかしいくらかの不安も抱いての船出であった。いわば全員が「新しい出会い」であった。

板野中学校においては同和問題学習は避けて通ることのできない問題である。同和問題が国民的課題といわれて久しいが現実には多くの困難を抱えて遅々として進まない一面が残念ながら存在する。このことは我々にも一教師にも生徒にも一当てはまるように思う。そんなとき来年度徳島県中学校同和教育研究大会を本校において引き受けるということが決定した。私たちはこれを積極的に自分達の問題として捉えていきたいと思った。生徒にもそれぞれにおかれた環境によってレベルに差があり、私たちも同様である。これを一つの機会とし生徒も教師も同和問題学習に真剣に取り組むことによって私たちの一つの生き方を作り上げることができるのではないかと考えた。同和問題の解消に向けての力を付けることは社会的な要請であり、同時に自らの生き方を問い続けることでもある。教師としてこの問題に真正面から取り組んでいくことについて異論はなかった。

新しい出会いー人間関係ーの中でのこの実践の方向は幾多の試行錯誤を予測させるものである。しかし一陳腐な表現になるが一「意あれば通ず」というのが私たちの共通項であったといえる。

私たちは

- (1) 日常活動の見直しと重視
- (2) 生徒、保護者との連携の強化

その上にたつての

- (3) 部落問題学習の充実

の3点を今年度の学年の重点的な実践目標とした。この小冊子はそんな願いのもと1年間の実践の報告書である。思いばかりが先に立ち十分な成果を挙げえないでいるが足跡としてまとめることによって、いたらなさを振り返り次年度へのステップとできればと思う。

平成3年3月

板野中学校 2年学年教師集団